

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成15年6月5日発行(毎月5日1回発行)
第43巻6月号(通巻527号)

風土

6



西行墳

神蔵

器

いのちなり西行墳の花仰ぐ
膝折つて僧と花冷え分ちあふ
思ひのこすことなし西行桜浴ぶ
西行の庵の跡やすみれ咲く
切株に蘂のゆめうつつかな

むらさきに海棠貴妃泪かな

花の寺さくら一本寄進せり

西行忌さくら昏れゆくこゑをもつ

弘川寺辞して河内の花吹雪

盃に一ひら浮かす普賢ふげん象ぞ桜う

旧二月十六日の月を上ぐ

花あればすなはち西行墳墓かな

竹間集

同人作品



永き日の

瀬戸

悠

浅春の泉にをんな跪づく
声明や赫と芽立ちのありにける
更紗木瓜ほつほつ心療内科かな
陽炎に路面電車の曳かれ来る
春愁の古代住居の点さるる
永き日の夕べ机上に手を置いて
うやむやな老いの起点よ亀鳴けり

春炬燵

宮城
白路

昼は邪魔夜はまだ欲し春炬燵
半眼で時計確かむ目借り時
あるもので済ます昼餉や白子干
買ふよりも値切る愉しみ植木市
目が合ひて猫が目つむる暖かし
もつれぬし蝶が番となりけり
言ふことも聞くこともなく春炬燵

重き封書

中谷
葉留

蝌蚪の国生れしばかりの尾を振れり
初音きく鎮守に近き宿りかな
ふるさとの霞の中に鳥城かな
初蝶と重き封書の来りけり
初音して熊笹に風およびけり
彼岸前納戸に日差し回り来る
制服のみじかきを吊り卒業す

涅槃雪

小林輝子

岩手領の雪形の鷲尾の薄る
紅深む水木の瑞枝雪解靄
犬ふぐりお星さまよと手渡され
五六羽の鵠の帰る暁の街
妣（矢張りにて）がりや竹を伏せたる涅槃雪
和賀流の遺影かくるる晚白柚
赤榛の根に抱かれしだるま草

くるぶし

小野寺節子

さりげなく二の舞かはす春の鳶
あの人がぼつくり逝けりお松明
入り彼岸残る寒さに愚痴こぼす
囁りに流し目なげる啞鴉
区役所のさくら二分咲き三分咲き
人人の目は口ほどに花めでぬ
惜春といふ雛僧のくるぶしに

春日照雨

小林清之介

啓蟄や見飽きてなほも視る雀
四月馬鹿猫好き同士よくしやべり
マラソン街道春や茶髪を振り乱し
犬コート着せておでかけ春日照雨
荒れ庭に知らぬ葎が出てゐたり
彼岸明けの蟻のじぐざぐ歩きかな
花（過去の季節なれど）の下おや尉鷄まだをりぬ

炎立つ

田村すゝむ

名残り雪踏みて「ガラスの森」歩く
赤ひげの先生の井戸水温む
流水の沖に真白き炎立つ
莖立や一所不在の山頭火
角ばつてゐる早春の刃物店
紫木蓮咲いて銀座に真砂女亡し
旧約新約聖書は祈り卒業す

山河集

同人作品



神蔵 器選

諡 は 円 光 大 師 貴 椿 関根 洋子

ぎんいろの翳を脱ぎたる辛夷かな
噴水の穂先をぬらす春の雨
午後よりの女の集ひ花ミモザ
中品の印の中より蝶の生れ

中村 洋子

うぐひすのこ糸の中なる三の滝
大観の「生々流転」青き踏む
料峭や海にせり出す六角堂
茎立ちや土の膨るる匂ひして
おぼろかな世阿弥自筆の能の本

平田 紀美子

夕空に雨のきざしや実朝忌
弓を射る所作の八節竹の秋
蕊立てて日裏に落ちし椿かな

ひとひらづつ放生池にこぶし散る
一本の杏あかりや宝戒寺

踏青や乾酪チーヌの村の結婚式

遠藤道遥子

断崖を蝶のぼりゆく隠岐の島
西行忌普通列車のひとり旅
彼岸会の大き牡丹餅故山かな
春蘭に声挙ぐ八ヶ岳やの散歩かな

若芽刈竿引摺りて舟しまふ 大森 美恵

春寒の漢書に重石の薬瓶
啓蟄の蟻哲学の道に出づ
立ちどまる小溝の堰の花菜かな
一口のそばの供養や大石忌

◇特別作品◇

佐保姫

大森
美恵

垣 繕ふ指のかたち包帯抜け
春 遅々と山号のなき法隆寺
佐 保姫と曼荼羅両図の間にゐて
下 萌やいさかひのあと繕はず
ふ らここに擦傷の子と膝並べ
掌 の窪に欠けたる桜貝
下 萌や城祉に石の井戸の蓋
落 の臺写経の筆を凭せかけ

春 霰 山 門 出 づ る 肩 先 に
雲 切 れ て こ ぼ れ 菜 峽 に 筋 を 引 く
春 の 旅 闇 に 眠 る を 忘 れ を り
た ん ぽ ぽ の 絮 毛 の 描 く S 字 かな
地 虫 出 づ 鐘 楼 門 の か げ り そ め
桃 の 花 蕎 麦 打 つ 音 の 店 の 裏
春 深 む 血 圧 計 の 上 り つ め
神 木 の 幣 古 り 土 筆 長 け に け り
掌 に 鳴 か ぬ 猫 の 仔 も ち 帰 る
堂 内 に 目 の 慣 れ 曼 茶 羅 菜 の 花 と
一 升 瓶 そ よ め く 花 の 下 に 置 く
閉 ざ さ れ て 久 し き 裏 木 戸 郁 子 の 花

風土独語／神蔵 器



水上バス三月十日のしぶき上ぐ

中沢 三省

昭和二十年三月十日、午後五時近く、私は午前中の授業、午後からは何時ものように農業の実習が終って遅い下校についた。横浜線の橋本駅で一人の老婆が大声でわめいていた。「ちきしょう。何だってこんなひどい目に会わなきゃならぬんだ。仇はきつととってやる。やつつけてくれ、やつつけてくれ！」しまいにはぼろぼろ涙をこぼし泣いていた。着物は焼け焦げ、顔は炎と煤でどす黒くなっていた。

東京大空襲はすでにニュースで知っていたが、その時はまだ詳細は知らなかった。九日の夜というより三月十日の午前二時頃から東京下町一帯がB29に空襲された。はじめに一機侵入してほどなく退去、空襲警報がいったん解除されたあとに、四百機近いB29が高度三百メートルぐらいの低空で襲いかかった。最初に外側に焼夷弾を投下し、退路を断つてから中心部に爆弾と焼夷弾を落とすという絨毯爆撃で、はじめから一般民衆の皆殺しを目的としたものであった。当夜は風が強く下町一帯はたちまち火の海と化した。前を逃げる人が直接炎に包まれていないのに突然、パアッと火だるまになって倒れる。町全体が発火点以上に達していたのだ。

僅か二時間半で八万五千余の死者を出した。

今は波静かな隅田川、観光客を多くさせて、水上バスが波しぶきを上げて航行している。

春の月浮力がついてきたりけり

根岸 善行

外にも出よ触るるばかりに春の月

汀女

紺耕 春月重く出でしかな

龍太

など、春の月はなかなか名句が多い。掲出句も満月であるが、どことなく霞んでいる。中天にぼっかり浮かんだ満月も、朧がかっているゆえに、それ自体浮力がついて高く押し上げられているように感じる。あくまで感覚的であるが無理なく共鳴できるところ、この感性を素晴らしいと思う。

冴返るイコンの下の木椅子かな

浜口恵以子

イコンはギリシャ正教会などで礼拝の対象としたキリスト、聖母などの像や描いたものである。作者がクリスマスチャンであるのかどうかは知らないが、今、眼前に見る木椅子には誰も腰掛けてはいず、聖堂は深閑と静まり、冴返っている。

イコンの下の木椅子に坐る人はどんな人であろうか。信仰心の篤い人ばかりとは限らない。「冴返る」という季語に象徴されるものは、罪多き人間、さだめない心の迷いに悩む人たちではなからうか。(以下略)

風土集



神蔵 器選

水上バス三月十日のしぶき上ぐ 平塚 中沢 三省

岩走る水に色あり春の山

川容れてけぶる潮目や実朝忌

すみれ咲く五代の墓や早雲寺

子も孫も男の子ばかりや葱坊主

春の月浮力がついてきたりけり

桃の花甲府盆地をあふれだす

油断して日永を使ひそこねたる

北の丸より卒業の溢れだす

花曇父の叱責届きけり

啓蟄の頃よりつけし備忘録

門ひらくニコライ堂の猫柳

春寒し近寄り難き懺悔台

冴返るイコンの下の木椅子かな

春寒し缶切り不要の缶を開け

春宵のボルガに手刷りの句集かな 東京 遊橋恵美子

三月や銀座に被写体三世代

春雷や華燭のブーケ投げらるる

路のたう筆先ほどにひらきけり

葱坊主甘え上手となりしか

春を待つ煤太りをり自在鉤

初音せり川のむかうに摩崖仏

さざなみの淡海の先の春霞

青き踏むゴヤの「巨人」の大地かな

皿に割る卵の揺るる初蝶来

浅春の拳の中に満つるもの

等伯の涅槃図三丈まみえたり

遙かより近む初音の起伏かな

坂東太郎堤ふくらむ花菜かな

春昼の巡回中てふ駐在所

上尾 根岸 善行

川崎 浜口恵以子

横浜 中村 洋子

東京 林 裕子